



# Petrified Forest National Park

## —化石の森国立公園

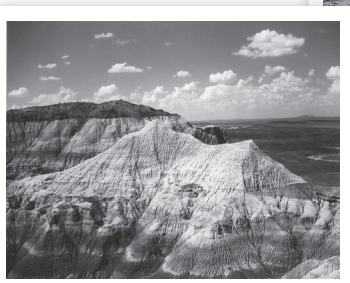
明治大学 依田里花

『化石の森に行きたいな…』という一言に、『あら、じゃ、行きましょう、明日』と言って、夢を現実へと導いてくれたのは私の友だちだった。

『化石の森』は、Robert E. Sherwood (ロバート・E・シャーウッド、1896 - 1955) というアメリカ文学史に名を残す劇作家が、1936年にブロードウェイで上演した戯曲の題名で、映画化もされて今もDVDで楽しめる作品である。その『化石の森』の舞台となった場所が、実際に、「化石の森国立公園」という名前がアメリカのアリゾナ州北東部に存在しているのだ。

「化石の森」というのは、文字通り、化石となった木々が大地に横たわる森…ならぬ砂漠である。なぜ、木が朽ちず、炭化もせず、化石になったのかを素人なりに単純化してみると次のようになる。時はこの地帯が熱帯に位置していた頃のこと。雨季の洪水によってなぎ倒された巨木群が濁流とともに押し流されて、やがて河床に留まった。そこへ遥か西方からの火山灰が砂とともに堆積するなど条件が相まって、大きな丸太がそのまま化石となって残った…ということらしい。中には、側面や断面がツルツルとして色とりどりの宝石のように美しい切り株もある。そのように2億年以上も前の化石が、およそ885km<sup>2</sup>の赤や紫の層を織りなす乾いた丘陵の谷間や大地に、ゴロンゴロンと「転がって」いるのだ。

ロバート・E・シャーウッドがこの地を訪れたのは、国際情勢に暗雲が漂う1934年のことであった。第一次世界大戦の従軍経験がある作者にとって、叢智を携えたは



ずの人類が同じ過ちを繰り返すことは、栄華の末に自ら滅びる選択をするに等しいものであった。化石の森に文明社会が重ね合わさって映ったのは言うまでもない。レスリー・ハワード演じる知識人のアランと、ハンフリー・ボガード演じる無法者デュークの対決を描き、世界がどこへ向かうのかを問うた作品は、このようにして誕生したのであった。国立公園のパフレットには、「過去と現在のあらゆるものと人類とをつなぐ、無限の知識と経験の宝庫」とある。園内を縦断する43キロの一本道を走りながら、2億数千万年もの時を経た自然の驚異に、改めて人間の営みを思った。

往復2千キロを超える3泊4日の行程で、「化石の森」に居られたのは僅か半日と短い時間であったが、帰国する直前に叶った夢のような思い出は、今も色鮮やかに宝の化石となって心の中に生きています。



## サンチャゴ巡礼路

麻布高等学校 岩佐洋一

サンチャゴ・デ・コンポステーラは、世界遺産にも登録されているスペイン北西部の町である。聖ヤコブの墓があることから、ローマ、エルサレムと並ぶキリスト教3大聖地の一つに数えられており、中世よりヨーロッパ中から巡礼者を集めてきた。四国88か所巡礼路は輪廻のように巡回しているが、サンチャゴ巡礼路はこの町が終点であり、そこに向かういくつかの経路がある。そのひとつ、ピレネー山脈からの約800kmの行程は、巡礼路自体が世界遺産に認定されたこともあり、近年多くの巡礼者、旅行者でにぎわっている。

この写真は、その巡礼路の道中に位置するBodegas Iracheというワイナリーにある「お接待」の蛇口である。蛇口のホタテ貝はサンチャゴ巡礼の象徴だ。十字架上のCamino de Santiagoはサンチャゴ巡礼路を意味し、Vinoはワイン、Aguaは水、蛇口は無料でひねることができる。ここでは誰でもワインが好きで、しかもただで飲むことができるのだ。

酒好きの方には、ぜひ彼の地を訪れてもらいたい。巡礼と聞くと敷居が高く思われるが、実は全くそんなことはな

い。スペインは物価も安いし、食事もおいしい。世界に名だたるリオハワインも格安でがぶ飲み状態だ。巡礼路上にはアルベルゲという巡礼宿が充実しており、宿泊の心配は無用だ。寝てシャワーを浴びるだけの場所がほとんどだが、一晚5〜10ユーロほどで泊まれる。食事も多くのレストランで立派なセットメニューが8〜12ユーロほどで楽しめる。しかもワイン付きだ。リオハをはじめとするワイン産地ではだいたいフルボトル1本が付いてくる。毎日歩き通しの日々に、この毎晩のワインは私の体にしみ込み、本当に疲れを癒してくれた。

さて、この写真のワインの味だが、実はあまり印象に残っていない。スペインに来る前からここは期待していたのだが、この地を通過したのが朝だったこともあり、酒、ことに「ただ酒」にはだらしのない私も、さすがに飲む気にはなれなかった。少しでも荷を軽くするため、ボトルに詰めることもしなかった。その晩泊まったアルベルゲで食事を共にしたオランダ人がペットボトルにこのワインを詰めており、そのご相伴に預かっただけだ。「さすがオランダ人、go Dutchの国だけに肩に食い込むザックの重さに耐え、ただ酒をよくぞ持ち帰ったぞ！」と感心しながら口にした赤ワインが随分ぬるかったことだけは記憶している。実は、彼は自転車巡礼者で、ワインはザックではなくサイドバッグで運んだそうだ。